校友時報

昭和43年2月10日
編集人兼發行所
秋田県能代市逆分町4番26号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所 大勝堂印刷所

前途多難の運動部

来年は一層深刻に

最近、全国的に高校生のクラブ加入率が低下する傾向にある。この傾向は、ここ数年来の大学の入学難を反映してか、特に普通高校に多いようだ。本校の場合もその例外ではなく、その度合は、年々深刻になってきている。この問題は別に、運動クラブとか、文化クラブなどと、特別のワクの中だけに限ったものではなく、クラブ活動全体、校内全体にそのような様子が見られる。しかし、今年は特に、その傾向が顕著にあらわれ、現在〃部員不足〃が深刻化している運動クラブにスポットを当てて見た。

現在本校の運動クラブの部員数は、十のクラブ全部を合わせてもすか一人である。また本校のクラブ当たり平均十人といえばしかし、クラブにおいては最も伝統があり、たびたび全国制覇をした体操部、同様に全国優勝の記録をもつバレー部においてもその様相がうかがえる。体操部は五人、バレー部は七人、しかもこのうち、一年生は共にわずかに二人ずつという弱体さである。これでは伝統を維持することは精いっぱいで、このままでは飛躍的進歩は望めそうもない。また、この問題は今年だけに限らず、今の一年生が主力となる来年においては、一層深刻かつ重要な問題となることであろう。

特に体操部においては、主に今まで部員を送りこんでいた二中、一中、一高深刻かつ重要な問題と二中の体操部が近ごろ、あまりぱっとしないということなども考えあわせてみると、お先真暗という状態である。このへんでクラブの現状と将来について、何か根本的な対策を講じないことには、今後ますます伝統がすたれ、体操部の影がだんだん薄くなっていくのではないだろうか。

バレー部にしても同様である。六人制バレーにおいては、補欠を含めて最低その二倍の十二人は必要とされている。それが現在本校の場合は、レギュラーの確保がようやくという状態である。これでは、メンバーチェンジも思うようにできないし、万一けがをした場合などは手のうちようがないのである。同様のことは籠球部にも言える。六人の部員ではどうもがいてみてもはじまらないのである。

硬式野球部は十五人である。軟式野球部も同じく十五人である。野球は九人いればできるようなものである。しかし、実際には少なくともその二倍または三倍の選手がいないとスムーズな活動ができない。今の十五人では紅白戦もできない。

柔道、剣道は団体の最低人数はどうにか確保してはいるものの、大前後では決して充分とは言えない。

陸上競技はリレーでは補欠を含めて六人は必要であるがその他の競技は個人競技であるので、比較的人数の制限は受けないが、学校対抗などの団体においては人数の多い方が絶対に有利である。

庭球は、コートの使用の関係もあって今のところでは実力が満たされている唯一のクラブである。

運動クラブ名	現在の部員数で満足か	1チーム最低必要人数(補欠も含む)	現在の部員数 1年	2年	欲する部員数
硬式野球	×	17	7	8	25
軟式野球	×	14	5	10	20
体操	×	6	2	3	10
陸上競技	×	6	7	3	30
卓球	×	3	1	2	8
庭球	○	14	9	7	14
排球	×	12	2	5	20
籠球	×	12	3	3	12
柔道	×	7	7	5	15
剣道	×	7	5	4	15
計		98	48	50	169

生徒会に思う

説部

史上最大の激戦が予想される大学入試で落ちかないこの頃、生徒会の沈滞が非常に目につく。

昨年秋の後期幹部役員選挙が予想以上に紛乱し、我々は後期生徒会運営に少なからず不安を感じないわけにはいかなかったが、はたして予想通りになった。

今年の生徒会は一年生の参加者が大変たく、一般生徒の関心も大幅に低下していた。それにつけ加え昨年秋からは各局から二、三年の脱部者が続出し、寒退に一層拍車をかけた。更に冬学期に入ると生徒は勉強一辺倒になり、生徒会への関心が薄れ、活動の沈滞は生徒会全域におよぶに至った。

文化局では活動範囲を縮少していたクラブが多く、体育局には試合に必要な最低限の人数を確保出来ないクラブも出て来た。どのクラブも数年来マンネリ化してきた部員不足が頂点に達した感がある。このままだと来年度はクラブの格下げ、同好会の格上げが問題となるであろう。

生徒会の中枢ともいうべき総務局が、ほとんど活動していないのは生徒会にとって痛い。生徒委員が企画部員や自薦編集委員をかねているという状態で人手不足のはわかるが、クラス選出で人数の揃っていて厚生、風紀両委員会がほとんど活動していないのは解せない。特に風紀の場合は校内に乱れが目立ってきているだけに、生徒の生徒会意識の低下をハッキリ表面に浮き出している。

ところが生徒会役員はこのような非常事態になんら手を打っていない。それどころか幹部の中には本間興を積極的に考えようとする空気さえないのである。全く遺憾というよりほかはない。幹部が生徒会の沈滞に対する打開策検討を回避してはこれ以上一歩も進めない。

最近、生徒会への関心が薄れ、活動の沈滞は生徒会全域におよぶに至った。

受験戦争のしわよせ

去年の春に新聞部で行なった「入部状況に関するアンケート」では全校生徒の約三十%に当たる三百人が文化、体育のクラブに参加していた。このうち運動部員は十六%で一年から三年まで百八十人、一学年当たり約六十人であった。これが三年生が実質的にクラブ活動から手をひいた三学期のはじめでは、一、一年生の約十三%の百人、一学年当たり約五十人で二十%近くも少なくなっている。現在各クラブで欲している人数は全部で約百六十九人で全生徒の二十%余りである。つまり生徒五人に一人の割合で運動クラブに参加すれば一応満足する事になる。

このように年々クラブ活動への参加者は少なくなってきている。特に一年生の数が少なくなってきていることは各クラブの前途多難を示していることを示していると思われる。

それではなぜこうも、年々新入生がクラブに参加しどがらない傾向が強くなってきているのだろうか。その最も大きな原因は二、三年来の大学入学難を反映しているらしい。「クラブをやるよりも、まず勉強して大学に入ることが先決問題だ。クラブは大学に入ってからでもできる」という声からもわかるように、クラブをやると勉強ができなくなるということである。高校生である以上、勉強が大切であることは言うまでもない。しかし、勉強のみが高校生活ではないはずである。遊ぶことも、友と語り合うことも必要である。あえて高校で〃クラブ活動は勉強に影響を与えるか〃という質問をしたところ、全生徒の約六十五%が影響ないと答えたそうだ。そして「もしクラブ活動をしていて成績が悪い生徒があったら、それは自分の努力が足りないのであって、決してクラブの責任ではない」ということだった。事実クラブと勉強の両立困難であるが、それを克服してこそ本当の高校生活の楽しさが味わえるのではないだろうか。

学制改革に想う

菊池忠一

現代世界は教育の爆発時代と言われている。それは現代ほど世界の諸国が教育に異常な関心を寄せていることはない。本校の場合もその例外ではなく、その度合は、年々深刻になってきている。この問題は別に、運動クラブとか、文化クラブなどと、特別のワクの中だけに限ったものではなく、クラブ活動全体、校内全体にそのような様子が見られる。しかし、今年は特に、その傾向が顕著にあらわれ、現在〃部員不足〃が深刻化している運動クラブにスポットを当てて見た。

現在本校の運動クラブの部員数は、十のクラブ全部を合わせてもすか一人である。また本校のクラブ当たり平均十人といえばしかし、クラブにおいては最も伝統があり、たびたび全国制覇をした体操部、同様に全国優勝の記録をもつバレー部においてもその様相がうかがえる。体操部は五人、バレー部は七人、しかもこのうち、一年生は共にわずかに二人ずつという弱体さである。これでは伝統を維持することは精いっぱいで、このままでは飛躍的進歩は望めそうもない。また、この問題は今年だけに限らず、今の一年生が主力となる来年においては、一層深刻かつ重要な問題となることであろう。

特に体操部においては、主に今まで部員を送りこんでいた二中、一中、一高深刻かつ重要な問題と二中の体操部が近ごろ、あまりぱっとしないということなども考えあわせてみると、お先真暗という状態である。このへんでクラブの現状と将来について、何か根本的な対策を講じないことには、今後ますます伝統がすたれ、体操部の影がだんだん薄くなっていくのではないだろうか。

バレー部にしても同様である。六人制バレーにおいては、補欠を含めて最低その二倍の十二人は必要とされている。それが現在本校の場合は、レギュラーの確保がようやくという状態である。これでは、メンバーチェンジも思うようにできないし、万一けがをした場合などは手のうちようがないのである。同様のことは籠球部にも言える。六人の部員ではどうもがいてみてもはじまらないのである。

硬式野球部は十五人である。軟式野球部も同じく十五人である。野球は九人いればできるようなものである。しかし、実際には少なくともその二倍または三倍の選手がいないとスムーズな活動ができない。今の十五人では紅白戦もできない。

柔道、剣道は団体の最低人数はどうにか確保してはいるものの、大前後では決して充分とは言えない。

陸上競技はリレーでは補欠を含めて六人は必要であるがその他の競技は個人競技であるので、比較的人数の制限は受けないが、学校対抗などの団体においては人数の多い方が絶対に有利である。

庭球は、コートの使用の関係もあって今のところでは実力が満たされている唯一のクラブである。

現代世界は教育の爆発時代と言われている。それは現代ほど世界の諸国が教育に異常な関心を寄せていることはない。本校の場合もその例外ではなく、その度合は、年々深刻になってきている。この問題は別に、運動クラブとか、文化クラブなどと、特別のワクの中だけに限ったものではなく、クラブ活動全体、校内全体にそのような様子が見られる。しかし、今年は特に、その傾向が顕著にあらわれ、現在〃部員不足〃が深刻化している運動クラブにスポットを当てて見た。

現在本校の運動クラブの部員数は、十のクラブ全部を合わせてもすか一人である。また本校のクラブ当たり平均十人といえばしかし、クラブにおいては最も伝統があり、たびたび全国制覇をした体操部、同様に全国優勝の記録をもつバレー部においてもその様相がうかがえる。体操部は五人、バレー部は七人、しかもこのうち、一年生は共にわずかに二人ずつという弱体さである。これでは伝統を維持することは精いっぱいで、このままでは飛躍的進歩は望めそうもない。また、この問題は今年だけに限らず、今の一年生が主力となる来年においては、一層深刻かつ重要な問題となることであろう。

特に体操部においては、主に今まで部員を送りこんでいた二中、一中、一高深刻かつ重要な問題と二中の体操部が近ごろ、あまりぱっとしないということなども考えあわせてみると、お先真暗という状態である。このへんでクラブの現状と将来について、何か根本的な対策を講じないことには、今後ますます伝統がすたれ、体操部の影がだんだん薄くなっていくのではないだろうか。

バレー部にしても同様である。六人制バレーにおいては、補欠を含めて最低その二倍の十二人は必要とされている。それが現在本校の場合は、レギュラーの確保がようやくという状態である。これでは、メンバーチェンジも思うようにできないし、万一けがをした場合などは手のうちようがないのである。同様のことは籠球部にも言える。六人の部員ではどうもがいてみてもはじまらないのである。

硬式野球部は十五人である。軟式野球部も同じく十五人である。野球は九人いればできるようなものである。しかし、実際には少なくともその二倍または三倍の選手がいないとスムーズな活動ができない。今の十五人では紅白戦もできない。

柔道、剣道は団体の最低人数はどうにか確保してはいるものの、大前後では決して充分とは言えない。

陸上競技はリレーでは補欠を含めて六人は必要であるがその他の競技は個人競技であるので、比較的人数の制限は受けないが、学校対抗などの団体においては人数の多い方が絶対に有利である。

庭球は、コートの使用の関係もあって今のところでは実力が満たされている唯一のクラブである。

時評

現代世界は教育の爆発時代と言われている。それは現代ほど世界の諸国が教育に異常な関心を寄せていることはない。本校の場合もその例外ではなく、その度合は、年々深刻になってきている。この問題は別に、運動クラブとか、文化クラブなどと、特別のワクの中だけに限ったものではなく、クラブ活動全体、校内全体にそのような様子が見られる。しかし、今年は特に、その傾向が顕著にあらわれ、現在〃部員不足〃が深刻化している運動クラブにスポットを当てて見た。

現在本校の運動クラブの部員数は、十のクラブ全部を合わせてもすか一人である。また本校のクラブ当たり平均十人といえばしかし、クラブにおいては最も伝統があり、たびたび全国制覇をした体操部、同様に全国優勝の記録をもつバレー部においてもその様相がうかがえる。体操部は五人、バレー部は七人、しかもこのうち、一年生は共にわずかに二人ずつという弱体さである。これでは伝統を維持することは精いっぱいで、このままでは飛躍的進歩は望めそうもない。また、この問題は今年だけに限らず、今の一年生が主力となる来年においては、一層深刻かつ重要な問題となることであろう。

特に体操部においては、主に今まで部員を送りこんでいた二中、一中、一高深刻かつ重要な問題と二中の体操部が近ごろ、あまりぱっとしないということなども考えあわせてみると、お先真暗という状態である。このへんでクラブの現状と将来について、何か根本的な対策を講じないことには、今後ますます伝統がすたれ、体操部の影がだんだん薄くなっていくのではないだろうか。

バレー部にしても同様である。六人制バレーにおいては、補欠を含めて最低その二倍の十二人は必要とされている。それが現在本校の場合は、レギュラーの確保がようやくという状態である。これでは、メンバーチェンジも思うようにできないし、万一けがをした場合などは手のうちようがないのである。同様のことは籠球部にも言える。六人の部員ではどうもがいてみてもはじまらないのである。

硬式野球部は十五人である。軟式野球部も同じく十五人である。野球は九人いればできるようなものである。しかし、実際には少なくともその二倍または三倍の選手がいないとスムーズな活動ができない。今の十五人では紅白戦もできない。

柔道、剣道は団体の最低人数はどうにか確保してはいるものの、大前後では決して充分とは言えない。

陸上競技はリレーでは補欠を含めて六人は必要であるがその他の競技は個人競技であるので、比較的人数の制限は受けないが、学校対抗などの団体においては人数の多い方が絶対に有利である。

庭球は、コートの使用の関係もあって今のところでは実力が満たされている唯一のクラブである。